

## SAHARA RACE 2009 サハラへの道(エジプト編)

宍戸 生司

レーシングザプラネットが企画する4DESERTS(中国のゴビ砂漠、エジプトのサハラ砂漠、南米チリのアタカマ砂漠、南極の氷床)、今回はエジプトのサハラレースに出場して来ました。MDS(サハラマラソン)は私も2度完走しましたが、とても有名な大会です。一般の人には、あまり知られていない4DESERTSのエジプトレースは、砂漠ランナーの間では有名なレースなんです。毎年10月中旬以降の時期に、カイロの南西にあるバフレイヤ・オアシス周辺のサハラ砂漠で毎年開催されています。白砂漠と黒砂漠が混在するサハラ砂漠を、7日間で約250kmを6つのステージに分けて走り歩きするレース。ゴールはギザのピラミッド前でのウイニング・ランになっていて、観光客の声援を受けながら走ります。

主催者から指定された装備と、レースに必要な衣・食・住は、すべて自らが準備し、バックパックに詰めてレースに参加します。水は1日に決められた量(約9~12ℓ)が支給され、寝場所は簡易テントが設営されており、この中で選手8名がともに寝起を共にし、野宿生活をしながらレースを続けていくスタイル。MDSとの違いは、BP(ビバークポイント)でお湯がもらえること。お湯がもらえれば、アルファ米やインスタント食品も簡単に調理でき、火を起こしてお湯を沸かす手間がありません。荷物の重量は個人差もありますが、約6~15kg。日中の気温は約40℃、明け方は10℃前後まで下がります。選手はコース上に設定されたピンク色のフラッグを目印にCP(チェックポイント)を通過して行き、その日のBPを目指します。ロードブックとコンパスを頼るより、先行する選手の姿や足跡をたどった方がコースは分かり易く、ロストウエイし難い。コースは、コースディレクターのカルロスが絶景ポイントを選んだタフなコースを作り、初出場でも不利にならないように毎年変更されている。今回は世界23ヶ国から120名が出場し、10月23日~10月31日の日程で開催されました。

10月23日

この日は、エジプトレースに出場する選手全員が、新カイロ地区にある高級ホテル(The Dusit Thani Lake View)への集合日になっている。私とサハラフレンズの仲間の4人は19日からカイロ入りしており、観光をしながらこの日を待っていた。昨夜、日本から到着した岩瀬さんも、私たちが宿泊する安宿に到着し、5人で夕食の買出しに夜の街へ。私はケバブーのサンドウィッチとハンバーガーを購入、何か変な味が口の中へ広がるのを感じながら食べていた。羊肉の独特の臭みかと思っていたが、それだけが原因ではなかったようだ。

深夜3時から体調異変が始まった。ベッドで就寝中に突然腹痛が始まり、トイレに駆け込むと、自分の意思に反して水様性の下痢が・・・。トイレからなかなか出られず、身体に倦怠感と悪寒を感じる。ジャンパーを重ね着してベッドに潜り込んだが、悪寒は増す一方。しばらくすると吐き気を催し嘔吐を繰り返した。4時過ぎには、街中からスピーカー越しの大音量でアザーンが聞こえてくる。イスラム教の礼拝の時間帯なのであろうか、毎朝この時間になるとお祈りのような声が聞こえた。朝8時まで浅い眠りとトイレへの往復を繰り返す。今日の午前中は、5人でスーク(市場)見学へ行くつもりだったが、私だけ安宿に残り、横になっていた。水分だけでも摂らなくてはと思い水を飲むのだが、嘔吐と下痢になって出て行ってしまふ。日本から持ってきた下痢止めや胃薬を服用するが、症状は改善しない。12時のチェックアウト前に荷物の整理をし、スーツケースやバッグバックに荷物を詰め込んだが、身体を動かすのがとても辛い。腰や関節が痛み、頭痛も出てきた。体温計がないので体温測定はできなかったが、38℃以上の発熱があるように身体が熱く感じられた。

この安宿からは車を2台チャーターしており、14時頃に集合場所のホテルへ出発の予定をしていた。安宿のロビーでソファに座り安静にしているが、容態は最悪。宿泊客の花篤さんにビオフェルミンをもらい服用してみる。また安宿の日本人女性スタッフの方にエジプトの下痢止めをもらった。出発まで時間があつたので、嫁さんに国際電話をかけ、今の自分の身体の状態を報告。この状態がレース前まで続くようであれば、レースを回避し出場しない旨を伝えた。この身体で砂漠レースを完走できるほど、甘いレースではない。「勇気ある撤退」・・・この言葉には素敵な響きがあるが、今の状態でレースに参加すれば生命危険が間違いなく訪れると判断していた。嫁さんは、「砂漠で遊んでくれば良いではないか。無理しないで遊んでらっしゃい。笑顔で日本へ帰国して欲しい。」と話していた。

移動の時間になったが、私は自分のスーツケースやバッグパックの荷物を持って歩くことすらできず、安宿の男性スタッフと佐藤君に荷物を持ってもらった。この安宿は建物の7階にあり、車が停めてある表通りまでふらふらな足取りで歩き車に乗り込む。カイロ考古学博物館近くのシェファードホテルに立ち寄り、村上さんをピックアップし、集合場所のホテルへ向かった。ここでも村上さん呼びにいけない状態ではなかったので、樺澤さんをお願いしホテルのフロントまで迎えに行ってもらうことに。

エジプトの交通事情であるが、道路を横断するだけで恐怖を感じ疲れてしまう。そもそも信号機自体を街中では、ほとんど見かけない。赤信号であっても車は止まらず、横断者がいてもクラクションを我が物顔で鳴らしまくって突っ込んでくる。車に車道の車線は関係ないようで、車が通れるだけの台数が車線となっていた。道路を走る全ての車がカーチェイスをしているような運転で、とても怖い。縦列駐車している車には車幅はなく、車がぶつかって止まっている。歩道は段差が多く、バリアフリーとは無縁な状態で歩き難い。

高速道路を車で飛ばしていると、ここにも道路を横断しようとしている人がいる。また、高速道路上で何かを燃やしている人も見つけた。助手席に乗った私は生きた心地はしなかったが、無事に集合場所のホテルへ到着。ホテルのロビーで受付をしていると、たけちゃんとテレサに再会した。たけちゃんはイギリスに住んでいて、私と一緒に出場する砂漠レースは今回で3回目である。彼との最初の出会いは4年前のMDSで、数ヶ国語を話せるナイスガイである。テレサは香港に住んでいて、今年のゴビマーチでも一緒だった。ゴビマーチで友人になった香港の消防士(ウォンヤストーン)とも共に、香港でランニングの練習をしているタフな女性である。受付をしていると頭痛と悪寒は続いており、テレサは私の顔色が優れないのを気にしていた。昨年出場したゴビマーチが縁で、たけちゃんとテレサは、現在交際している。

私は受付を済ませホテルの部屋へチェックインすると、そのままベッドへ潜り込んで身体を休めた。部屋は2名一室で、戸高さんとは安宿でもこのホテルでも部屋が一緒になり、とても迷惑をかけてしまった。浅い眠りに付きかけた時、部屋の電話が鳴った。電話の主は、レーシングザプラネット日本事務局の近藤さんからで、ホテル到着の確認電話のようであった。近藤さんは今回のサハラレースでは、ボランティア・スタッフとしてレースに参加している。戸高さんから電話を替わってもらい、私の今の身体状況を説明する。数時間後、近藤さんがメディカル・スタッフの医師を伴って、部屋まで私の様子を見に来てくれた。医師(女医)の名はバルと言い、とても親身になって診察をしてくれた。私はウイルス性の腸炎に感染したようで、下痢や腹痛、嘔吐の症状が出ているとのこと。電解質飲料を飲んで、糖分を摂るように指示され、処方された薬を服用した。数時間の内に体調は劇的に快方し、身体にも力が入るようになってきた。

夜になり空腹感も出てきて気がついたのだが、昨夜から食べたものはビスケット2枚だけであった。佐藤君の部屋に6名の日本人選手が集まり、ルームサービスでピザやスパゲティ、サンドウィッチを

注文して食事をしたが、食欲はあるのだが量的には胃が受け付けない。医師の診察を受け、電解質飲料を飲んで糖分を摂るように指示されたと話をすると、佐藤君から余剰にあるポカリスエットをいただいた。ポカリスエットが、こんなに美味しい飲み物だと感じたのは初めてだった。

10月24日(レース前検日)

この日は朝食後、割り振られたテント毎に時間を決められ、レースの装備品チェックが午前中に行われる。午後からは、7時間かけて明日のスタート地点へバスで移動し、砂漠での生活が始まる。

朝目覚めると、下痢以外の症状は改善しており、体調も戻りつつあった。これから1週間は風呂に入れないので、時間をかけて入浴をしてから装備の点検に備える。7時過ぎに近藤さんがバル医師を伴い、様子を見に来てくれた。身体の状態を伝え「レースに出場できそうです」と話すと、バル医師も近藤さんも喜んでくれた。実は昨日、このままの身体状態であれば、レース出場を回避する旨の話を私は申し出ていた。バル医師も危険と判断した場合は、レースに出場はさせない意思があったようだ。今日一日、砂漠へ着くまでの時間を静養し続ければ、下痢も治まるのではと密かに期待をしたのだが。新しい薬をもらい、バル医師と近藤さんにお礼を述べると、「レース中に何か具合が悪くなったら言ってきなさい」とバル医師が微笑みながら言ってくれた。

ホテルのレストランへ行き、テラスで朝食を食べた。麺類が食べたかったのだが、主食はパンしかない。食欲はあるのだが、胃があまり食べ物を受け付けないので食べる量が少ない。自分で調整しながら、口に入れられるものを選んで食べた。また、ジュースがとても美味しく感じ、腹が膨れるまで飲み続けた。

8時過ぎに前検日前のブリーフィングが始まった。すべて英語で話しをするので、意味は半分も分かれれば御の字です。あとは、たけちゃんに話の内容を聞いて、日本人選手に伝言ゲーム。私が寝泊まりするテントは、No.14のラムセス。各テントには、エジプトのファラオの名前が付いていた。私の装備点検の時間帯は11時からだったので、のんびりと時間に余裕があり、たけちゃんに頼んでレース中のメール送信する登録を行った。また、次回のアタカマ砂漠のレースに備えて、新しいゲータを購入する。

点検するスタッフも、装備点検の終盤になると疲れていたのか？点検はゴビマーチの時よりも厳しくなく、1つ1つ装備品を出してのチェックするようなことはなかった。しかし、9時から点検を受けた選手は、かなり厳しくチェックされたと後から聞いた。スーツケースをフロントに預けチェックアウトし、いよいよバスに乗り込んで砂漠へ向かう。昼食のサンドウィッチと水を受け取り、指定されたバス(4号車)に乗車して出発。車窓からはカイロ市内の街並みを眺め、ナイル川に架かる橋を渡ってギザのピラミッド群を横目に、バスは進んで行く。街の建物が閑散としていき、ついには車窓からは砂漠しか見えなくなるが、バスは順調に砂漠地帯を高速で進んで行った。

少し眼を閉じて浅い眠りに付いていた時に、後部座席から怒声のような大声が聞こえてきた。ハッと眼を覚まして後ろを振り返ると、バスの後方から黒煙が舞い上がって車内に充満してきている。バスの前方に座っているスタッフも異変に気がつき、バスの運転手に指示して車を路肩に停めさせた。バスに乗っていたスタッフや選手は全員バスから降りて、何事が起こったのかと思案顔。私もバスから降りて、バスの後方に回り込むと、ちょうどバスの運転手が後部のハッチを開放した。その途端に、黒煙が噴出し辺りは煙りだらけになったが、火炎は見えなかった。車のファンベルトか何か磨耗してボロボロになっているのが見える。予備のファンベルトに取り替えていたが、バスは一向に動き出す気配なし。

4号車の乗員は、思い思いに砂漠に散らばり用を足しに行く。私もトイレットペーパーを片手に砂漠の中へ入っていったが、道路から30mほど入った所に列車のレールが地平線の先まで伸びていた。ポジションを決めて、まずは右足の踵で縦目に線を引く。線を引けば凹ができていたので、そこに用を足せば自分の足にかかる心配はない。下痢をしているので長めの線を引いたのだが、お尻を拭く度にモノが出てくるので、その都度数歩アヒル歩きをしながら前進する。結局、1mほど引いた線では足りず、さらに50cmほど前に進んで業務終了！

バスの近くに戻ると、代替のバスが来るまで砂漠の中で待つとのこと。しばらくは、久々に地平線まで広がる砂漠地帯を堪能できたが、だんだん飽きてきた。時間があるなら凧揚げを慣行しようと思いい用意をしていると、1台の小型マイクロバスがやって来た。すし詰め状態で選手は乗り込むが、全員は乗り切れない。私は次のバスを待つことにしてマイクロバスを見送った。代替バスが来るまでには、時間はまだまだあるので凧揚げをしたが、風が無いので上手く揚がらない。砂漠を走るのも疲れたが、カメラマンのザンディーが写真を撮っているので止める訳にもいかず、30分ぐらい凧と格闘していた。

凧をしまってから、藤岡さんと二人でバスの外で話をした。藤岡さんは4DESERTSのレースは初めてだそうだが、南極レースは通過点として考え、1000マイルのギネス記録を更新する夢があるそうだ。彼の考えでは12日間程度で走破する記録を考えているようだが、凄過ぎです！今回のエジプトレースに出場するために3年間毎日10kmの走行練習も欠かさなかったとも話していた。

夕日が西に傾いた頃、やっと大型バスが1台引き返してきた。このバスは1号車で、先行していた選手やスタッフの荷物が、そのまま積まれている。砂漠に取り残された選手とスタッフの合わせて10数名がバスに乗り込み、夕日が沈む砂漠の一本道を走り抜けていく。夕闇に砂漠の姿が隠れ、天空に星が広がりだした頃、バスが高速走行から停車した。ドライブインのような場所に数台のバスが止まり、選手やスタッフがワイワイしている。

ここでお湯をもらい夕食にするか、スタート地点に着いてから食事にするかの選択を迫られた。ここでもらえるお湯は、ペットボトルの水を沸かしたものではなく、エジプシャンが一般的に飲んでいる水を沸かしたもの。「下痢が心配な人は、スタート地点まで待つべきだ」と衛生的な判断は理解できるが、テントに着くのは何時になるかは分からない。現時点での予想到着時刻は、深夜23時になるとのこと。睡眠時間を考えれば、ここで夕食にするべきだと思い、「明星一平ちゃん」のヤキソバにお湯を注いでもらいに行く。お湯はコップで計り売りされているらしく、1回1回コップにお湯を入れてから容器に注がれた。お金はもちろん4DESERTSのスタッフ払い。こんな砂漠の中にあるドライブインで、ヤキソバを食べるのも乙なものである。他の日本人選手の羨ましそうな視線が心地いい♪

ここでも下痢は続き、砂漠の中へ数度入って行き用を足した。私は、間違ってもドライブインの中のトイレで用は足せない。日本のような清掃されたトイレを想像するなら、入らない方が良いだろう。砂漠の中の自然な環境の方が、出るものも出やすい。夜になって、ようやく代替のバスが到着すると大歓声があがった。割り振られたバスに乗り込み、ようやくスタート地点へ再移動開始。深夜1時頃にテント村に到着し、No.14ラムセス・ホテルに自分の寝袋を敷くことができた。ホテルを出発してバスに乗り込んでから、12時間かかり到着したことになる。焚き火でお湯を沸かしている周りには、果物やパックジュースがあり、飲食自由であった。バナナとジュースで夕食にし、明日のレースに備えて就寝。

10月25日(第1ステージ: Arabian Nights) 34.3km

朝6時に起床、まだ太陽は顔を出していない。寝袋から出ると寒さを感じたので、ウインドブレーカーを着た。焚き火の周りでは早くも食事をしている選手がいる。そろそろ太陽が昇り始めるので、砂

の上に座って御来光の時を待つ。地平線の彼方から、ゆっくりと太陽が顔をだす姿はとて雄大で、生命の源であるを感じずにはいられない。そんな太陽の朝日を浴びてから、トイレトペーパーを片手に歩き出す。トイレは砂漠の中に4つ作られているが、私は女性専用と考えて使わない。砂漠レースでは、テントから100m以上離れた場所であれば用を足して良いルールになっている。

砂漠でのトイレへの往復も、足裏にマメができる、移動がとても辛くなる。下痢は続いていたが、その他の症状は消失していて体調的には悪くはない。食欲も出てきているし、身体の倦怠感もないので、レースに出場できる喜びが溢れてきた。「レースに出場するからには、ゴールは外さない」、今までもこれからも、レースに対する気持ちは変わらないだろう。ただ、レース中に生命危険が発生した時は、話は別だが。

朝食の用意をし、荷物のパッキングをする。この荷物のパッキングが私は本当に苦手で、毎度パッキングには時間がかかり、ぎりぎりまで荷物と格闘している。この日はスタート時間が9時に変更になっていて、8時30分にはレースの事前説明のブリーフィングが開始予定時間。私が荷物のパッキングを終え、3回目のトイレから戻って来ると、ブリーフィングが始まっていた。ブリーフィングではコースの説明や注意点が説明され、いよいよスタートの時間が迫る。

私は砂漠レースでのスタートは最後尾からと決めているので、スタートラインに並んでいる選手の、一番後ろへ回り込んだ。やはり、たけちゃんも最後尾におり、二人で記念撮影。最後尾からレースをすると、まずロストウェイをする確立が低くなり、道に迷う心配がない。また先行する選手の姿を追ってれば良いので、目印のピンク色のフラッグを探す必要がなくなる。走り出せば歩いている選手を追い抜いて行けるので気分もよく、このスタート方法はやめられない。

参加人数が多い人気マラソン大会では、最後尾からスタートすると、スタートラインを越えるまでに20～30分も時間がかかることがある。しかし砂漠レースでは、1分も待てば最後尾にいる選手も、スタートラインを越えてレースが始まっている。毎日約40kmのレースを続けて行くのだから、先を急いで並ぶより、後方から安全と気楽さを優先してスタートした方が、私には合っている。このスタート方法を教えてくれたのは、4年前のMDSで一緒だった隅田さん。彼は東海大学の先輩である。

英語での10カウントダウンが始まり、いよいよサハラレース2009がスタート！スタートゲートの両脇では、エジプシャンによる打楽器での演奏が鳴り響き、ゆっくりと歩いてスタートゲートを通過した。私の周りには、村上さん、岩瀬さん、高橋くん、たけちゃん、藤岡さん、戸高さんがおり、それぞれの思いが交錯してのスタート。

私は200mほど歩いてから自分のペースで走り出した。地面は走りやすい土漠地帯が続いていて、足場がよい。砂漠に身体を慣らすようなジョギングペースだが、久々の砂漠に鳥肌が立って興奮している。約1時間走ってから、歩きに変えた。まだ荷物が重いのと、体調が回復していないのが気にかかる。歩きに変えるとCP1が見えてきた。暑さもあまり感じていないが、汗はかいている。レース初日と2日目は、熱中症になる確立が高いので、決して無理はしない。今回はレース前に体調不良により、一度は自分の心の中でレースに出場するのを断念したのだから、リタイヤだけはしたくない。

CP1では戸高さんと高橋くんと一緒になった。砂漠レースでは、誰かと一緒にレースをすると、自分のペースが狂うので、私は一人旅で進む方が、気が楽なのである。CP1からは、少し足元が軟らかい砂丘地帯が続いた。砂漠の中に入ると、無音世界が広がる。聞こえるのは風の音だけだが、時折、選手が歌う歌声も聞こえてくる。自分の足音と息づかい、バッグバッグが擦れる音だけが砂の中に染み込んでゆく。

11時を過ぎると、やたらと暑さを感じてきた。気温は40℃を超えている。背中に積んだキャメルバッグのチューブから水を飲んでいるのだが、バッグバッグからはチューブの部分が出ており、そのチューブの中にある水は、太陽の直射日光に熱せられ、ぬるま湯になっている。口の中に水を含んだら、ゆっくりと少しずつ喉に送り込んでいく。砂漠レースでの水切れほど、悲しいことはない。

CP2に着くと、近藤さんとDr.バルが笑顔で出迎えてくれた。二人とも私の体調不良を心配し身体の状態を聞いてきたので、下痢だけが続けているが大丈夫とOKサインをだすと安心してくれた。CPでは水1本(1.5ℓ)が支給され、次のCPまではこの水でやりくりしなければならない。しかし、通過した選手の飲み残した水を「ダーティー」(人が飲んだ水:汚れた水という意味)と呼び、後から来た選手が身体の冷却に使ったりすることもできる。私はこの「ダーティー」水を使って、よく頭や首すじの冷却をした。

CP2からCP3へ向かっている途中に、後方から足音が聞こえてきた。カナダから出場している盲目のランナー、ロンさんだった。ロンさんはカナダ人選手(トム)の伴走を受けながら、砂丘地帯を走り、時には自分のペースで歩き、砂漠を越えてゆく。ロンさんはフルマラソンでも3時間半ぐらいで走破する脚力の持ち主で、モロッコのMDSも完走している。

CP3手前2kmぐらいで水が切れた。私はいつも、水を充分に持ってレースしているのだが、水を飲みすぎたのだろうか?計算違いにより水が切れたとは考え難い。CPまでの時間がとても長く感じ、口腔内の舌と口蓋が水分失って口が開かない。ガムを噛みながら唾液を出して、CPへ辿り着いた。CP3では受け取った水を一気に半分ほど飲み干す。水が満タンに入ったペットボトルがダーティーの所に置いてあり、高橋くんを取ってもらってGETした。水がCPまで持たずに切れたことを考えると、気温がかなり上昇していたとしか考えられない。

またCP3では、霧吹きによるサービスがあった。今年のゴビマーチでも、よくCPに着くと霧吹きで顔から頭から水をかけてもらったが、気化熱の影響でとても涼しく感じる。今回のレースからは、日焼け止めが落ちると選手から問題定義があり、廃止になったと聞いていたので、私には嬉しいサービスであった。次はBPであるが、水を多めに持って出発した。

CP3からは、さらに気温が上がり灼熱の大地そのもの。一步一步確実に足を進めてゆく。石灰岩でできた奇怪な形の白い岩が、無言で応援してくれるように見える。私は用を足しにコースから脇道にそれて、小さな砂丘の影に入って行った。前にいたアメリカのシンクが振り返り「ロストウェイしているぞォー」と声をかけてくれたが、私は「問題ないよ、トイレをするだけだから」と言葉を返すと、笑って親指を立てながら先に進んで行った。ここでも下痢をしていたが、それよりも気になることがあった。レースが始まってから、一度も尿を排出していないのである。BPに着いたら、オシッコが出るまで水分補給をせねばと考えていた。

夕暮れ時にBPに到着した。先着していた樺澤さんと佐藤くんが出迎えてくれる。樺澤さんは7位でゴールしたと満足そうに話していた。レース前から調子が良いとは言っていたが、「どんだけ変態なんだ?」と樺澤さんに言うと嬉しそうに笑っている。私は私で完走を目的としておりレースをするだけなので、人との順位は気にしない。ただ、日記を書く都合上、毎日の順位はゴールで確認することにした。佐藤くんを支給されたペットボトルの水3本を運んでもらい、ラムセス・ホテルに着いて荷物を降ろす。足裏に痛みもなく、サンダルに履き替えて凧揚げ開始。後からゴールする人たちの目印に、少しでもなればと思い凧揚げをした。

水を飲みながらメール・テントを訪れ、嫁サンにレースの状況と体調をメールで報告。また、嫁さ

んや友人、同僚の仲間から応援メールが届いており、メールを読む前から胸が熱くなった。砂漠の中で読むメールは、格別に気分がよく、時には涙しながら読んでいる。気持ちのこもったメールを送ってくれた皆さん、ありがとうございます。

メール・テントから出ると、夕焼け雲の隙間から白砂漠に向かって虹がかかり、心を奪われる景色に感動した。今日は日の出と日没の光景、砂漠の中で太陽が地平線へ浮き沈みする姿を目にすることができ、とても心が奮えている。テントに戻るとテントメイトのクリスチャンが話しかけてきた。彼はオーストリアでは有名なトレイルランナーのようで、今回のレースには彼に密着取材しているテレビスタッフとカメラマンもいる。「セージ、明日からタバコを吸うのは止める。私も20年前まで葉巻を1日40本吸っていたが、今はやめた」と言っている。クリスチャンに、「タバコはやめないよ！これが私のエネルギーで、私の好きなものだから」と笑顔で答えておいた。

レース1日目：34.3km 7時間05分25秒 88位

日没後は、アルファーマにさんまの蒲焼の缶詰と味噌汁で夕食にする。準備をしていると、数人の外国人選手が、さんまの蒲焼の缶詰に興味を覚えたようで、「それは何だ？」と質問してきた。缶詰ごとお湯に浸けていたのだが、「さんまの蒲焼」を英語で説明できるほど私の語学力は優れていない。絶妙なタイミングで、たけちゃんが夕食を持って私のいるテーブルにやって来た。たけちゃんの手に行っている袋の中にも、さんまの蒲焼の缶詰と味噌汁があり、外国人選手にたけちゃんが上手く説明してくれた。外国人選手は、「さんまの蒲焼の缶詰と味噌汁」を、日本人が好むポピュラーなインスタント食品と理解したようであった。

夜になって耳栓をしながら寝袋に包まれていると、テントの中が騒がしい。耳栓を外すと、「ポツポツ」とテントに当たる雨音が聞こえる。この地域では、年間に4回ほどしか雨が降らないことを後から聞いた。とても貴重な体験だったようである。夕焼け雲に虹が出ている光景を思い出し、砂漠でも雨が降ることに驚きながら眠りに落ちていった。

深夜に目が覚めトイレに行った。寝袋から出ると、肌寒く感じる。雨は止んでおり、星空を見上げながら用を足す。しばらく星空を眺めていると、流れ星を見ることができた。星空観察も、砂漠レースでの楽しみの1つになっている。BP到着後、何度か尿が排泄できたことで、脱水症状から開放されたと安心し、再び寝袋に潜り込んだ。

10月26日(第2ステージ: Marathon el Qarawin) 44km

朝6時前に起床、テントの外はまだ薄明かり。早くも焚き火の近くでは選手が食事をしている。寝袋を撤収し、朝陽が昇るのを見ながら食事の準備にとりかかる。食後、砂漠で用を足してきたが、未だに下痢が続いている。下痢は軟便になってきており、自分の意思で便が出せるのだから、症状的には治まってきていると判断した。

テントで荷物のパッキングをしていると、また雨が降ってきた。雨は通り雨程度のものであったが、砂漠には似合わない気がする。パッキングを終えてテントの外に出ると、ブリーフィングの時間になっていた。この日もタイム制限は設定されておらず、体調が完全に戻るまでは無理はしない。タバコを吸っていると、クリスチャンが「セージ、今日からタバコをやめろと言っただろう」と冗談交じりに話しかけてくる。クリスチャンに久々のタバコを吸ってみるかと言われ、差し出すと、オーバーアクションで苦笑いをしていた。

今日は昨日より10km距離が長いので、ゴール予定時間を9時間の夕方17時頃と想定し、最後尾からスタート。足元の地面の砂が、とても柔かく感じる砂丘地帯を、自分のペースで歩いてゆく。昨日はレ

ース中に水切れをしたので、少し多めに水を積んでいた。また、朝の雨で湿度が高くなり、砂漠の暑さも一段と過酷になると予想したのも水を多目に積んだ理由である。

マイペースで足場が固い砂地は走り、砂地は歩いて行く。隣から「ハイ、セイジ♪」と香港のテレサが声を掛けてきた。テレサは昨年ゴビマーチでも同じレースに出場したが、彼女は歩くのがとても速い。ゼブラのバフを首に巻き、砂漠地帯を淡々と進んで行く。レースに関しては、とても意志の強い女性と感ずるのだが、テント村では笑顔の素敵な女性である。

1時間ほど走り歩きをした頃に、私の前をふらふら歩くランシャツ・ランパン姿の選手が目に入った。この姿でレースする選手は、こんなポジションにいるはずがない。後ろから声をかけようとする私の目に、見慣れた小型のカラビナがバッグバッグにぶら下がっているのが見えた。今日のスタート前に、樺澤さんが写真を撮る時に、小型のカラビナにデジカメの紐を結んでいた光景が瞬時に甦る。横に並ぶと右肩に日本国旗があるのが確認できた。

「樺澤さん、大丈夫か？足元がふらついて、ゆっくり歩いているけど、具合が悪いのか」と聞くと、「お腹がゴロゴロして気持ちが悪い」と言う。まずは彼のバッグバッグを地面に降ろしてやり、その場に座らせた。意識は清明だが顔色は悪く、呼吸は浅く速い、全身状態からは倦怠感があるように感じられた。脈拍には不整脈も感じられず、発汗はしているが著明ではない。話しを聞くとスタートしてしばらくしてから胃の辺りの不快感が発生し、嘔吐や下痢の症状はないが、走れなくなって歩いていたと言う。

私が持っていた整腸剤とH2ブロッカーを飲ませ、私の影で日影を作りしばらく休ませることに。岩瀬さんが通り掛かったので、CP1に着いたら胃の不快感を訴えている選手が1名いることを医師に伝えてくれと伝言を頼む。樺澤さんは自分自身でも、胃の不快感になって走れなくなった原因が分からないようであった。戸高さん、高橋くん、村上さん、たけちゃんが通り過ぎて行く。私は声をかけるだけで、自分と樺澤さんがここで休んでいる状況を確認してもらい、立ち止まらずに先に進むように促した。

韓国のユーさんが、声を掛けて来てくれた。ユーさんもバッグバッグから薬を取り出し、樺澤さんに飲むように勧める。樺澤さんの両手が浮腫んでいるのを確認すると、手をマッサージし始めたので私も手伝う。また、ユーさんが後ろから来た韓国の選手に樺澤さんの症状を伝えると、彼は樺澤さんの親指の第1関節に糸を巻きつけて駆血し、ジェル状のアルコールで皮膚と針を消毒してから、爪の根元に針を刺した。両指の爪の根元からは3ヶ所から血が数滴でできた。ユーさんにこの行為の意味を聞くと、血液の循環を良くするために血を抜いたとの説明をしてくれた。

水で後頭部を冷やさせるが、樺澤さんの飲み水はなくなっていく。CP1までは残り2kmほどの距離があり、歩きでの水なし行程では厳しい。樺澤さんに「CP1まで一緒に行くか」と聞くと、「お願いします」と返事がもどってきた。幸いにも私のキャメルバッグには、まだ水が1割程度残っている。樺澤さんの歩に合わせて、二人でCP1を目指して砂漠を越えてゆく。交互にキャメルバッグの水を飲みながら、前を歩く選手が米粒ほどの大きさに見えるのを目印にして進む。

CPが見えた時に、CPから車がやって来るのが見える。岩瀬さんがCPに着いて、スタッフに事情を話し、車を向かわせてくれたと思った。スタッフが運転する車が私達の横に停車する。車には医師も乗っており、「車に乗るか、どうするか」聞いている。樺澤さんに、「車に乗ったらあなたのレースが終わることになる。ゆっくりCP1まで歩いて行くか、車に乗るかどうする？」と聞くと、「ゆっくりCP1まで歩いて行き、CP1で少し休みます」と乗車拒否。2人でCP1に到着すると、樺澤さんは医師からの問



診を受けていた。たけちゃんが先着し休憩していたので、通訳をお願いします。たけちゃんがいれば、私のボディ・ランゲージの出番はない。最後尾には駱駝に乗ったエジプシャンが、ピンク色のフラッグを回収しながらやって来るのだが、CP1にはこの駱駝がいた。つまり、この時点でテントにいる人は最後尾を意味する。

それにしても暑さが厳しくなってきた。何気なく温度計を見ると43℃と表示している。昼間は50℃近くになるのを覚悟しなければならない。CPで休憩後、樺澤さんに「先に行くけど、あとは自分の判断でね」と声をかけ出発。高橋くんも一緒にコースに出た。高橋くんは、「砂漠レースでは自分のペースで進んで行かないと疲労が溜まるから、私に合わせる必要はないし、私も高橋くんのペースには合わせないでね」と、最初に断りを入れておく。自分の歩いている先の砂漠が、沸騰しているようにゆらゆらと揺れている。砂漠と空が、陽炎で歪んで見えた。凸凹した小さな砂丘の間を通り抜け、足元が取られやすい柔らかい砂漠地帯が続く。

高橋くんは上智大学の大学院生で、学校を休んでサハラレースに出場している。来年卒業で大手企業にも就職が内定しており、とても好青年。高橋くんといろいろな話しをしながら、歩を前に進めて行く。高橋くんが、「あの辺で少し休憩しませんか」と言うのを待っていたかのように、私も腰を下ろしたかったので2人で休憩開始。この日の最高気温は、49℃まで上昇したと後日聞くことになる。

後方から村上さんが歩いてきた。彼女はいつも自分のペースを守り、堅実にCPでの休憩で体力を回復させている。トライアスロンで培った自分の身体能力をしっかりと把握して、レースを楽しんでいるように見える。砂漠レースでは、私を感じる「強い」選手の1人である。村上さんと言葉を交わし、我々も先へ進もうとすると樺澤さんがやって来た。尿が出るまでCP1で休憩するように医師に指示を受け、尿が出たので走って追いついて来たと言う。まだ、胃の不快感は治まっていないようであったが、大丈夫だろうか？ 私たちと一緒にゆっくりCP2を目指すかと誘ったが、少し休んでからCPを目指すようであった。

何度か振り返り樺澤さんを確認するが、追いついてくる気配はなく、次第に彼の姿が後方の砂漠に見えなくなっていた。CP2が見えた時に、CP2から車が向かってくるのが見える。車に合図を送り停車させ、「後ろを歩く日本人選手の状態が心配だ、様子を見てきてくれないか」と話しをすると、CP1にいた医師が乗り合わせていた。状況を理解しているので、話が早い。CP2からCP3、BPまでの距離は22kmあり、コースもディフィカルトになっている。今の気温は45℃で、今日はまだ暑くなりそうだ。この気温の中を体調不良のままで砂漠を乗り越えていく行為は、私には自殺行為のように感じる。「最終的な判断は本人が下すべきだが」と思い、自分も尿が出ていないのに気がついた。

CP2に着く手前で、スタッフの車の後部座席に、樺澤さんが乗っているのが見える。「頑張れよオー」と笑顔で手を振っている姿を視認したが、「勇気ある撤退を判断したのか」と、私の心が揺れた。今回のサハラレースにエントリーをし、仕事場での休暇取得に至らずレースを回避した、赤坂さん。私が着ているガラビィーヤには、「赤坂さん、Fight!」の文字が貼り付けられている。樺澤さん、赤坂さん、私の3人は卒業した大学が東海大学で同じで、「東海大学OB変態砂漠レースクラブ（仮称）」の仲間意識を持っている。樺澤さんのリタイヤにより、エジプトレースで完走できる可能性があるのは、私だけになってしまい責任が重い。

CP2では、高橋くんも暑さにやられている顔していた。自分も他の選手から見れば疲れた顔をしているのだろう。村上さんは、車の横にできた小陰にダンボールを敷いて横になっている。樺澤さんも車に持たれかかり、座って休んでいた。行動食を胃に流し込み、バッグバッグのサイドポケットに入れているボトルにスポーツドリンクを作る。もちろん、このボトルには濡れた靴下を履かせている。砂

漠で少しでも冷たい飲み物を飲むなら、気化熱を利用しない手はない。昨年のゴビマーチの時に、アメリカ陸軍軍医のビンセントに教えてもらった方法で、砂漠ではとても重宝する冷えた飲み物の作り方である。

CP2を高橋くんと出発し歩き続けていると、前方に戸高さん発見。戸高さんは持病の腰痛が痛むのか、時折、腰を伸ばしている。普段の戸高さんの歩くスピードは、私も追いつけないほど速い。戸高さんも交えて3人で砂漠の中で一休み。私は砂漠レースに中のCP間では、ほとんど休憩を入れることはないのだが、今日は何かが違うと身体でも感じていた。休憩を入れないと、逆に疲れが溜まり歩けなくなるような気がしていた。

休憩後、CP3を目指し再び歩を進めていると、灌木の脇で休んでいる野人を発見。その野人は、アルミックシートに包まっておき、私たちが近づくと引きつった笑顔で話しかけてきた。その野人の正体は岩瀬さんで、暑さで疲れが増して、砂漠に寝転んで休んでいたと言う。視界が開けた砂漠を4人で歩き出す、なかなかCPが見えてこない。だいぶ日が西に傾きかけた頃にCP3が見えてきた。微妙に上り下り坂になっている砂丘地帯を歩き続け、ようやく到着。レース前の目標時間である17時になっていた。残り10.9km、BPの手前には砂丘越えのコースが待っている。砂丘越えのコースをととても楽しみにしていたのだが、暗闇の砂丘越えは、どんな感じがするのだろうか。

BPを目指して地平線の先まで続く平らな砂地を歩んでゆく。太陽が砂礫の山に沈んでいく姿がとても美しい。砂漠も空も夕日を浴びて茜色に染まり、徐々に天空が星空に囲まれて行く。コースを示すピンク色のフラッグにも、蛍光ペンライトが取り付けられており、選手がロストウエイしないように輝いている。前に大きな砂丘地帯が見えてきた。あの砂丘の手前で一休みした後、砂丘越えをすることに。日が沈むと少し肌寒く感じたが、歩き出せば身体が熱くなるので上着は出して着なかった。

砂丘地帯に入り込むと、見た目より斜面が急勾配で、いくつもの砂丘の稜線を越えてゆく。日があるときに、ここから見る景色も堪能したかったが、夜は夜で星空を見上げながら進むのも楽しいものである。ヘッドライトの明りを足元の砂丘に当てながら、「砂丘の斜面を、ダンボールを尻に敷いて滑り降りたら、どんなに楽しいだろう」と想像しながら歩んでゆく。ゴールでは4人一緒にゴールし、長い戦いが終わった。私には、とても良い思い出ができ、よき経験になった。

レース2日目：44km 11時間34分29秒 91位

ホテル・ラムセスに荷物を降ろし、靴を脱ぐと、足裏に巨大なマメができていた。夜ご飯より先に、メール・テントが閉まってしまうのでメールをしに行き、今日の出来事と身体の体調を嫁さんへ報告。また、新しいメールが嫁さんや友人たちから着ており、疲れを忘れさせてくれる。夜ご飯を食べてから、足裏のマメの治療のためにメディカル・テントを訪れた。自分のテントでは、すでに寝る態勢に入っている選手もおり、ヘッドライトの明かりしかないので暗くて処置ができない。自分で足裏を消毒しマメに針で穴を開けて水抜きをし、抗生物質を塗布してからコンピードを貼り付けテーピングで固定し処置完了。

メディカルを出るとユーさんがいたので、樺澤さんの件でのお礼を述べた。ユーさんが何気なく私の肩に手を回し、とても驚いている。肩凝りがものすごくあったようで、マッサージをしてくれた。自分でも背中が重い感じがしていたのだが、肩凝りが原因だとは思わなかった。テントに戻り、自分でも肩をマッサージしてからバンテリンを塗りたくった。

後日聞いた話したが、ユーさんはこの日のレースで体調が悪く、CP2で3時間近く休憩してからレースに復帰し、BPに辿り着いたそうである。流石に砂漠レース12回も出場していると、自分の体調管理

と把握ができており、リカバリーする方法を知っていると感心した。

今日もレース中に放尿することがなかったので、水とスポーツドリンクをガブ飲みして水分補給をする。その影響で、夜中に数回起き出して放尿する事になったが、流れ星を見ることができた。

10月27日(第3ステージ: The Roman Ruin) 42.5km

朝6時に起床したが、朝7時にテントが撤収され7時半にブリーフィング、8時にスタートと言う事なので、急いで朝食と足裏の手入れをし、荷物のパッキングに取り掛かる。今朝、用を足しに行ったら便が固まっていた。さらにガスも出ているので、これで体調は万全だが、足裏のマメが悪化しないように気をつけよう。昨日、嫁さんにメールを送信したが、寝不足気味なので今日は日没前にテントに帰り、早寝することを宣言しておいた。果たしてどうなるか？

7時を過ぎてもテントは一向に撤収される気配はない。私はテントの外でレースの準備をしていたのだが、エジプシャンは時間にゆとりを持って行動する民族なのだろうか？モロッコのMDSでは、ベルベル人が有無を言わずテントをバツバツと撤収して行く。テントに選手がいようがいまいが、お構いなしにテントを倒して行くので、外に出された選手が、砂漠の中で寝袋に包まっている姿を多く見かけたものだが。明朝からは、私もゆっくりと行動するようにしよう。

レース前にたけちゃんと話しをしていると、たけちゃんはチームで参加しており、チームメイトの男性選手が昨日リタイヤしたと言っていた。たけちゃんは私より速い選手だが、今回はチームのサポート役に徹している。チーム全員の完走を目指していたので、とても残念がっていた。しかし、これ以上は無理とたけちゃんが判断し、CPでドクターに彼の話をしたそうである。

たけちゃんはチームを組んでいる3人(男性2人、女性1人)と、もう一人イギリスの選手(男性)を加えたの4人で共に行動しレースをしている。チームの3人は大学時代の同級生とのこと。3人の選手を励まし、内緒だが時には彼らの荷物も持って砂漠を越えている。チームで出場した契機は、チームメイトの父親が癌に侵されており、癌基金のチャリティーを作ってレースに参加したと話していた。レース後たけちゃんは、表彰式でベスト・サポート賞を受賞することになる。

スタートしてからは、いきなりの砂丘越えが続く。砂丘の稜線を選手が一行になつて進んでゆく。先頭集団に目を移すと、樺澤さんが2番手で砂丘を駆け上がっている。そんな彼を見て「キチガイだな」と思うのと同時に、体調が復活して安堵している自分がいた。砂丘越えが終わると、足元が柔らかい砂地のアップダウンが続く。走れる砂漠は小走りで駆け、足がとられる砂漠は早歩きで越えてゆく。

テレサも調子が良いみたいで、挨拶を交わすと先に進んで行った。CP1の手前は上りの砂漠が続いており、私と同じ速度で砂漠を歩く女性選手がいた。彼女はカナダから出場しているキャリーで、英語で話しながら一緒に進んでゆく。彼女とはとても仲良くなり、この日以降テントで会ってもCPで会っても会話するようになった。上り坂だと足裏のマメの痛みが強くなり、少しペースを落とす。戸高さんと高橋くんが追い抜いていった。私は砂漠レースでは、「誰々には負けないとか、何位になるとかは」全く気にしていない。自分のペースで砂漠を走り歩きし、素敵な出会いと景色を堪能しながら完走できれば、それで大満足なのである。

CP1に着き、休憩は10分程度。手際よく水をキャメルバッグに流し込み、頭に巻きつけたタオルを濡らして顔を拭く。CPではゴミも捨てられるので、タバコの吸殻やガムの包みを廃棄する。砂漠レースでは、指定された場所以外にゴミを捨てるとペナルティーの対象になるのだが、砂漠にレースをしに来てゴミをポイ捨てる行為自体、私には理解ができない。どんな理由があろうと、コースを汚すよう

な行為をする選手は、レースに参加するべきではないと考えている。

先にCPに着いて休んでいた高橋くん「もうCPを出るんですか」と聞かれたので、「これが私の休憩するペースだから、先に行っているよ、追いついたら来てね」と手を振り出発。エジプトのサハラ砂漠は、朝の10時頃から15時頃までの暑さが非常に厳しい。CP2を目指して歩いているけど、ガンガンに太陽が照り付けてくる。日影になる場所は、砂漠ではまず見つからない。今日までに家や村、家畜小屋等の人が住んでいる気配も感じられず、人工的な工作物も目にしなかった。砂漠に来ていつも感じるのは、子供の頃に見た西部劇の景色。この場所に幌馬車が通り、カウボーイやインディアンが岩陰から現れても、何の違和感も覚えない。仮面ライダーに登場するショッカーも、似合いそうな景色が広がっている。

気温は45℃に跳ね上がる。また地平線の方の景色が揺れて見えるようになってきた。途中で戸高さんと高橋くんが、私の後ろからやって来て先行してゆく。砂漠レースでは発汗により塩分が急速に失われていくので、固形塩を1時間置きに飲んでいる。この固形塩は3年前のMDSで一緒だった鶴瀬くんで購入してもらったものである。鶴瀬くんは「だんじり祭り」で有名な大阪の岸和田市に住んでおり、「だんじり祭り」では山車を引く人が塩分不足に陥りやすいために、薬局で普通に固形塩が売られているそうである。固形塩は砂漠レースに出場するのに、私には欠かせない一品になっている。

CP2に到着すると、近藤さんがDr.バルと一緒に迎えてくれた。踊りながらCPに入り込み、ペットボトルの水をもらう。CPで休んでいると、岩瀬さんがやって来た。何となく暑さにやられている顔つきをしているが、冗談を言う元気があれば大丈夫。足の痛みはないようだが、スパッツと下着が擦れるのか肛門が痛いと言った。その症状は、「砂漠に住む微生物が原因で、寄生虫がそのうち肛門から出てくるよ」と言うと、岩瀬さんは真に受けたようで心配していた(笑) 岩瀬さんは、本当に肛門が痛かったのだ。これ以降は、岩瀬さんに会うと、肛門の具合を聞くようにした。

CP3を目指し、歩を進めていると、石灰岩の奇怪な形をした岩が立っている砂漠にでくわした。本当に不思議な形をしていて、とても大きい。どのように岩が風化したら、こんな形になるのだろう。石礫の多い上り坂を登っていると、前からスタッフの車がやって来た。車が私の横に停車したので、何かと思っていたらスタッフのサマンサが、「ハイ、セージ。水は足りている？」と聞いてくるではないか。キャメルバッグの水も心細くなってきた時だったので、バッグバッグ横の空のボトルを渡すと、水を入れてくれた。サマンサに、「ちょっと待って」と言い、一気にボトル内の水を飲み干し、お代わりをもらう。サマンサ、いい仕事してますねえ〜♪

坂を上りきると、さらに砂丘の上り坂の砂地が続いていたが、坂の上にはオアシスがありCPになっていた。どうやらこのCP3では、水が出るらしく「ひょっこりひょうたん島」のような雰囲気の中で醸し出している。CPに着いて水の出ている所に行くと、池のようになっていた。タオルだけ濡らし顔を洗うが、水が臭い。贅沢は言われていられないので、手足も洗ってタバコを一服した。残り11.6km、日没までには到着できそうである。

CP3を出てBPを目指して走り歩いていると、ユーさんとトムがサポートして、ロンさんの伴走をしているのが見えた。距離はおおよそ700m、追いつけるか、追い越せるか、ゴールはまだ見えていない。夕日を背に浴びながら走り出す。ゴールで打ち鳴らされる太鼓の音が聞こえて来た。距離がどんどん縮まるが、足元は深い砂地で走り難い。小さな砂丘を越えると、下り坂の砂漠の先にBPが大きく見えた。ゴールまで約500m、ロンさんたちとの距離は約200m、追いつけなくても走ることが楽しく、足裏の痛みも忘れて走り続ける。

ゴール前でカメラマンのザンディーが写真を撮っている。ザンディーに笑顔で手を振り呼びかけ、写真を撮ってもらう。ゴールの決めポーズは、サタデーナイトフィーバーのジョントラボルタのポーズでフィニッシュ！手をクルクル回す「愛の風車」も付ければ良かったと反省(笑) ゴール後、ロンさん、ユーさん、トム、私の4人で写真を撮ってもらった。

レース3日目：42.5km 9時間24分29秒 68位

テントに荷物を降ろしてから、バッグパッグのサイドポケットにある凧を取り出し、凧揚げ開始。ラムセス・テントの柱に凧紐を巻きつけて、凧を空に放置してから着替えを先にした。ガラビィーヤには汗で塩が吹いており、汗で湿っている。テントの間のロープを物干しにし、凧になびかせる。安全ピンで留めておけば、凧で飛ばされることもないだろう。

樺澤さんは、今日は5位でゴールし、荷物検査も受けたそうだ。上位に入ると食料を捨てていないとか、何やらチェックがあるようだ。藤岡さんも佐藤くんも調子が良いようで、自分の順位を気にしながら走っている。樺澤さんが5位になるような走りができて、体調は完璧に戻ったようなので安心した。今日の気温も49℃まで上昇したそうだが、砂漠の天境線まで延びる陽炎は、空まで続く蜃気楼のようにも見えて、とても不思議な感じがする。気温が高くなると陽炎を見れるのだが、ガラビィーヤから露出している肌が刺すように痛くなる陽射しは、勘弁してほしい。

足裏のマメが、自分では治療ができないくらいに悪化していたので、医師に診てもらいにメディカルへ。悪寒がしてきたのでDr.に訴えたと、毛布を用意してくれた。痛み止めと抗生物質は服用しているので、傷の治療だけをしてもらう。毛布に包まりながら治療を受けていたら、別の医師に足の裏の写真を撮られた。症例検討でもするのだろうか。

夕食の準備をし、味噌うどんとアルファ米を用意する。樺澤さん、岩瀬さん、高橋くんの4人で談笑しながらの夕食。味噌うどんは食べられたが、アルファ米は見ただけで食べる気がしない。箸をすすめようとするが、口に運ぶ気が失せている。アルファ米は、次の日の朝食に回した。私の食事メニューは麺類を中心に考えてきたのだが、アルファ米も何食分かは持ってきている。ここまでアルファ米に嫌気がさすとは、思いも因らなかつた。岩瀬さんと高橋くんは砂の上に寝そべり、マッタリした夕食後の時間を過ごしている。

レース中に小便に行っているかの話題になり、やはり全員がトイレに行く回数が減ってきているとのことだった。高橋くんは、レース2日目から下痢の症状が出ている。今日の私はCP間で毎回放尿しており、下痢の症状もないので水分調整は図れており、問題なし。しかし、スポーツドリンクと行動食は前倒して消費しているので、量が激減している。レース後半戦の補給の仕方を考え直さないと、オーバーナイトステージ前にスポーツドリンクと行動食は底を突く。アルファ米が食べられるようになれば、行動食の問題は解決できるのだが、難しい。

食後、テントに戻ると戸高さんが帰ってきていた。食事の用意もしていないので話を聞くと、昨日から食欲がなく、ほとんど食べていないと言う。戸高さんに、メディカルでの受診をするように話しをするが、明日になれば治ると思うと話し腰を上げてくれない。昨夜も食事をしないで疲れたから寝ると言い、寝袋に入っている姿を思い出した。戸高さんにレースで完走したいのなら、メディカルへ行き受診した方がよいことを説得する。砂漠レースでは、選手はカロリー消費が著しく大きく、食べ物が食べられなくなれば、リタイヤが待っているだけなのである。ようやく戸高さんも重い腰を上げてくれて、メディカルへ一緒に行ってくれた。

医師に戸高さんの症状を伝えたと、薬を処方してもらい、食べられる行動食から食べ、スポーツド

リンクを多目に飲むように指示されていた。明日には食欲が回復して、食べられるようになってくれれば良いのだが。

村上さんが暗闇の砂漠と格闘し、テントに帰還して来た。本当に感心するほど元気に見えるが、砂漠での長時間の格闘で疲れていない人はいない。もともとの体力と精神力も、トライアスロンで鍛え上げたものなのだろうか。英会話学校にも通い英語を勉強中とのことで、旅もレースも楽しもうとする向上精神がとても旺盛。話していても年齢を感じさせない面白さがあるのだが、空港でスペイン人に間違われたと言う髪型は似合っていないよオー(笑)

レース4日目が砂漠レースで最も過酷に感じる日。明日を乗り切れば、惰性でオーバーナイトステージはクリアできるのだが。毎日40km近くの砂漠を乗り越えてきたのだから、無傷でいられるほど砂漠レースは甘くない。

10月28日(第4ステージ: Route of the Nomads) 40.5km

夜中に2回トイレに起きたが、とても外は冷え込んでいた。3時半頃に用を足した時は、砂漠に月が沈んで行く光景を見ることができ、寒さに震えながら感動した。また、砂漠に来て3回目の流れ星も見れて心が躍る。こんな寒空の深夜に、星を見ている物好きは私だけ。トイレのついでに密かな楽しみになっている。

夜明けと同時に起床し、準備開始。食料品が減ってきて、バッグバッグの重量も軽くなっている。足裏のマメを治療したコンピードが外れているので、自分で新しくコンピードを貼り付けて手直しをした。しかし靴下を履くと足裏に違和感があり、靴下の中で暴れそうな予感がする。思い切ってコンピードを剥がし、テーピングだけにして今日のレースに臨むことにした。

日焼け止めを腕や足に塗りたいのだが、砂漠の強い陽射しで日焼けしている。私はレース前になると、腕と足のムダ毛を剃刀で処理し、ピップエレキバンを貼り易くし、また夜に塗布するバンテリンを塗り易くしている。ピップエレキバンの貼り痕は、日本に帰国したあとでもクッキリ日焼けしないで残っていた。

レースのスタート2時間前に起床して準備をしているのだが、私は荷物のパッキングが下手で、いつも時間がかかってしまう。レースの仕度が整ったのは7時45分、既にレース前のブリーフィングは始まっていた。今日は制限時間が設けられており、CP2までは15時、CP3には18時に到着していないと、足きりでリタイヤになる。足裏の状態を考えると、走ることはできないので、今日は一日歩き通す事にする。

スタートラインに選手は並ぶように指示されたが、タバコが吸いたかったのでスタートの脇で吸っていた。樺澤さんは今日も走る気満々のようで、スタートゲートの真下の先頭に陣取っている。正面に回りこんで写真を撮っていたら、スタートのカウントダウンが始まってしまい、慌ててタバコの火を消す。選手がスタートして行くのを見送ってから、スタートラインの横からゲートを潜ってスタートした。

コースは真っ直ぐに緩やかな上りの砂丘が続いている。途中でカナダのキャリーに会い、挨拶を交わす。中国のリーとも顔なじみになり、微笑みかけて話をする。今回のサハラレースには、世界23ヶ国から120名の選手が出場している。エントリー者は126名だったが、6名は出場を回避したようだ。日本からは10名が選手として参加し、ボランティア・スタッフとして近藤さんがレースの運営を手伝っている。

この120名の選手とボランティア・スタッフ、エジプシャン・スタッフによってレースは開催されており、とてもアットホームな大会になっている。選手同士やスタッフとのコミュニケーションは、とても親近感があり私は好きである。CP1を無難に越えCP2に着くと、近藤さんが出迎えてくれた。近藤さんは私の足の状態を心配してくれていたが、私は戸高さんの食欲不振が気になっている。近藤さんに戸高さんの食欲不振の話をし、昨日メディカルで薬を処方してもらった話しをした。

CP2からCP3に向かい黒砂漠を歩いていると、前に急斜面の砂丘越えが現れた。黒砂漠は黒い小さな石が無数に散らばっており、砂漠を全体的に見渡すと黒い砂漠に見える。砂丘を乗り越えて荷物を降ろし、用を足していると、遠くからスタッフの車が近づいてきた。荷物を背負い直し歩き始めると、車にはサマンサが乗っていて、昨日に引き続き水を補給してくれるのではないかと。14時前後の時間帯はサマンサ・タイムと思い、水の補給を砂漠で得られると考えるようになって来た。

サマンサは、私がレース前に下痢になり苦しんでいた事も、また2011年の南米チリのアタカマクロッシングにエントリーしている事も知っている。彼女は昨年ゴビマーチでもスタッフとして参加しており、メール・テントでもメールを送信する方法を覚えてもらい、会えば必ず「セイジ〜」と陽気に話しかけてくれる。とても気さくなお姉ちゃんで、その笑顔に岩瀬さんはメロメロになっていた。

黒砂漠の谷あいの砂漠を上り下りしていると、またスタッフの車が近づいて来た。車にはメアリーが乗っており、インタビューをしたいようである。メアリーはレースの主催者で代表者。メアリーは、今回の大会に選手として出場する予定になっていたのだが、何らかの理由で走らなくなってしまった。彼女にサハラレースの感想を聞かれたのだが、先ほどサマンサに会って気分がアタカマ砂漠のモードになっていた私は、「次は、アタカマに行くぞー」と答えておいた。

CP3に着くと、なぜかCP2にいたはずの近藤さんがおり、水のペットボトルを手渡してくれた。疑問に思っていると、戸高さんがCP2とCP3の間でリタイヤしたとのこと。やはり砂漠レースでは食欲がなくなり、食べられなくなればリタイヤが待っている。私もアルファーマイが食べられなくなってきているので、気をつけねば。

BPまで残り11.9kmの道のりを、茜色に空が染まりだした無音の黒砂漠を進んでゆく。今回のサハラ砂漠では、蛾のような蝶を見ただけで、鳥や虫を見ていない。車が1台近づいて来ると、近藤さんとザンディーが降りてきた。またインタビューの開始である。それにしても近藤さん、今日はどこにでも出没し、スタッフも大忙しのような様子であった。

BPに着いてから、足裏の状況を確認し、自分のテントに戻った。藤岡さんに、「今日も早かったね」と声を掛けられ、バッグバッグを降ろすと、疲れがドッと押し寄せてきた。明日は朝6時スタートで起床時間も早い。私はオーバーナイトステージでは、途中で仮眠することは考えていないので一気にBPを攻め落とすつもりである。そのためにも昨日と今日は、睡眠時間を確保するために自分のペースを上げて、砂漠を越えてきたのである。藤岡さんに、明日は朝が早いから、自分なりに急いで帰ってきた旨を話した。今回の時間差スタートは上位者16名で、レース4日目までの成績順で選ばれる。日本人トップの藤岡さんは、残念ながら16名の次点ぐらいの順位で、朝6時スタート。樺澤さんもレース2日目の体調不良がなければ、いい経験になる面白いレースができただろうに。

レース4日目：40.5km 8時間55分38秒 69位

10月29日～30日(第5ステージ：The Black Desert March) 87.6km

朝4時に起き、オーバーナイトステージの日を迎えた。今朝のスタートは6時なので、ヘッドライトの灯りを頼りにレースの準備を進める。テントの外はまだ夜の暗闇が広がっており、空には無数の星

が瞬いている。気温も下がっているの、一段と寒さを感じながら朝食の準備をした。昨夜はトイレに3回起き、腰痛もあって寝不足気味。しかし、消防で培った不眠不休で身体を動かす力は、まだ残っているはずだ。

今日までの4日間で、161.3kmの砂漠を乗り越えている。今日のステージでは、87.6km先にあるBPを目指して一日中砂漠を渡り歩くレースになる。9つの区間に分けられたコースを、8つのCPを通り抜け、明日の15時までに辿り着かなければならない。CP4とCP6、BPでタイム制限が設けられ、タイム内に通過しなければリタイヤとなる。

朝食は五目御飯、噌煮込みうどん、トマトペンネの3本立てにした。しかし、まともに食べられたのはうどんだけで、食欲はあるのだがアルファ米は喉を通らない。食べなければと思うほど、見るのも嫌になっていた。行動食とスポーツドリンクも下痢の時に前倒しして食べていたので、底を付きかけている。CP4では紅茶のサービスがあり、CP6ではお湯の支給がある。CP4まで何とか行動食をつないで、CP6でラーメンを食べるつもりだ。CP6からBPまでは、水だけで砂漠を越えてゆく。目標のゴール時間は深夜5時、夜明け前のスタートから24時間以内にテントに帰りたい。

まだ夜が明けきらない薄明かりの中、選手がスタートラインへ向かって行く。今日だけ凌げば、完走が確定的なものになる。最後尾からゆっくりと10カウントダウンを聞く。スタートしてからは、CP1へ向かう途中に朝日が昇ってきた。砂漠に昇る太陽は、地平線の先から現れるので感動的に見える。雲が紫色からオレンジ色に変色して行き、太陽が灼熱の大地を焦がして行く。スタートからCP3へは、休憩時間も入れて6時間かからずに通過、砂と土漠が多い道なき砂漠を抜けてきた。

CP3からは、アメリカのシンクと一緒に話をしながら進んだ。シンクはワシントンDCに住んでおり、インドから移民して来たと話していた。ワシントンの夏は、緑が多く爽やかで、とても良い季節だから遊びに来いと誘われた。シンクが先に進んでくれと言うので、そのままペースアップしながら進むと、カナダのキャリーが歩いていた。

キャリーにカナダの話聞き、私にもカナダに住んでいる友人がいる事を話した。カナダには去年のゴビマーチで一緒だったジェームスと若菜さんが住んでいる。二人は共に、20代の男性女性の1位だった変態である。今年の夏に二人は婚約し、今年の夏に続いて冬も日本へ来る予定。カナダは冬場の気温が-30℃まで下がり、寒さがとても厳しいと、キャリーも二人と同じ事を話していた。レース終了後の表彰式では、キャリーは30歳代女性1位で表彰されている。

後方から走ってきた2人組に声をかけられた。テントメイトのクリスチャンが、「ヘイ、シュガレット！」と私の顔を見て微笑み手を振っている。このステージを無難に越えられれば、優勝は彼のもの。クリスチャンに「走れえ〜♪」と日本語で声援を送り、手を振り返して彼の背中を見つめた。私が6時間かけて越えて来た砂漠の道のりを、彼らは半分の3時間あまりで走り去ってゆく。2人に苦しそうな表情はなく、会話をしながら普通に走っている・・・ちょっとお二人さん、ここはエジプトのサハラ砂漠なんですけどお〜！？

少し石礫が混じる緩やかな斜面を上っていると、前にロンさん、トム、ユーさんが子供達に囲まれていた。レース5日目にして、ようやくレース関係者以外の人に出会った。子供は7~8人おり、お菓子や飴をせがんでいる様だ。子供の足元に眼を向けると、裸足の子供が数人いる。残りの子供でも靴を履いていたのは1人だけで、後はサンダルを履いていた。年齢は4歳から6歳くらいの男女の子供で、デジカメを向けると愛くるしい表情でカメラを見つめてくる。

斜面を上りきると、そこは崖の上になっており、眼下には砂漠の中にオアシスと村が広がっている



のが見えた。心を奪われる景色、絶景！子供達は、崖の下に広がるオアシス村から、選手がやってくる方向へやって来ていたのである。子供達は崖からの下りの急勾配を、慣れた足取りで走って行く。村まで1km弱の距離であったが、子供には追いつけなかった。

CP4がハッキリ見える手前に、村の人が住んでいる家が建っていた。家の前では数人の子供達が遊んでおり、母親らしき大人の女性も玄関口に立っている。私はバッグバッグに積んでいた凧を取り出し、村の子供達と一緒に凧揚げをした。凧は気持ちよさそうにエジプトの青い空へ舞い上がり、空から私達を見つめている。エジプトの子供は凧を知らないようで、興味津々の目で凧の姿を追っている。子供に凧の揚げ方を教え、「また戻ってくるから、この凧で遊んでいて」と子供に話し、CP4へ向かった。

CP4に着くと紅茶のサービスがあった。紅茶には砂糖がたっぷり入っているのだが、これが甘くて美味しい。少し熱過ぎると思っていたら、私の隣に座っていた選手が水を入れてくれたので、飲み易くなった。紅茶を3杯お代わりし、最後の行動食であるクッキーを頬張りながら、凧揚げをする楽しげな子供達の姿を目で追いかける。休憩して一息つけたので、子供達のところへ戻り、また一緒に凧揚げを楽しんだ。

今回のサハラレースに出場して、2つ楽しみとして考えていた事があった。1つ目は、レース中にエジプトの子供と凧揚げを一緒に楽しむ事。2つ目は、ゴールのピラミッドで凧揚げをして、自分が揚げる凧でピラミッド越えをする事。そんな遊びをするために、「凧」を背負って砂漠レースをしている。凧は2つ日本から持ってきていたが、ピラミッド越えを狙う凧の糸は300m用意していた。

子供達に凧の揚げ方をもう一度教えていると、カメラマンのザンディーが写真を撮ってくれた。子供達に別れを告げてレースに戻り、ピンク色フラッグを目印に村の中を歩きながら後方を振り返ると、「凧」が砂漠の風に泳いでいる姿が見える。この村の子供達には、日本人選手が持ちよった文房具用品を集め、近藤さんをお願いして届けて頂けてもらった。「エジプトの子供達に文房具用品のプレゼントを！」の発起人の赤坂さん、あなたの意志は達成しましたよ。子供達に聞いたら、「文房具用品を受け取ったよ、ありがとう」と言っていました(ボディー・ランゲージでのやり取りだったけど)。

村を通過中に、娘の利菜(りな)と同年くらいの年齢(11歳くらい)の女の子に、呼び止められた。私がガラビィーヤを着ていたのが珍しかったのだろうか？女の子は手に持っていた椰子の実を、「食べて」と優しく微笑みながら私に差し出した。1つだけ椰子の実を貰って食べてみると、粘着力のある甘みが口に広がる。種の回りの実の部分を、手をベトベトにしながらか食べた。彼女に文房具を受け取ったか身体を使って話しをすると、ちゃんと受け取っているようで、お礼を言われた。

村を抜け砂丘を越えると、また村に入った。砂漠のオアシスは西から東へ縦長に伸びていて、オアシスの水路を利用して畑で何かを栽培しており、農作業を手伝っている子供もいる。ロバに乗って悠々と砂漠のあぜ道を進む少年にも出会った。ピンク色のフラッグを追いかけてCP5を目指しているのだが、途中でフラッグがなくなっていた。村の子供たちの手にフラッグが握られているのを見ると、引っこ抜いて遊び道具にしているようだ。前に進む選手の人影を追いかけていたのでロストウェイはしなかったが、夕暮れ時に通過する選手は、コースを見失しなう恐れもある。先行していた戸高さんに追いつき、一緒にCP5へ到着すると、近藤さんが出迎えてくれた。

このCP5にはオアシス村に水を引き入れるためのプールがあり、選手が涼を求めて頭をプールの水につけている姿を見かけた。休憩しながら、近藤さんにフラッグが引き抜かれていることを話すと、スタッフがフラッグをコース上に挿している傍らから、子供たちがフラッグを引き抜いてスタッフに手

渡しして来る。スタッフの方は、そんな苦勞を重ねながらコース上にフラッグを設置していたのである。戸高さんは、もう少し休んでからCPを出るとのことだったので、私だけ先にCP6を目指して出発。

背中の方から夕日が当たり、私の影が足元の砂に浮かび上がる。よくよく自分の影を見ると、砂漠には風によってできた砂紋が、砂の大地に刻まれていた。現在嫁さんは妊娠中であり、来年の2月に出産予定になっている。考えていた生まれてくる子供の名前を、砂紋の砂の上に書いてみた・・月紅(るな)、名前の由来は、今は私と嫁さんの心に閉まっておくことにする。

CP6への道のりの過程で日が沈み、西の空をオレンジ色に染め上げている。一番星も空に見え始め、月が明るく輝き出す。ちょうど、CP間の半分の目印の旗がある場所で、長袖シャツを着込み、ヘッドライトに明かりを灯した。砂漠では太陽が沈むと、日中の暑さが嘘のように冷え込んで来るので、歩いていても肌寒い。行動食もCP4で食べ切っていたので、空腹で胃が痛む。CP6に着けばお湯が貰えるので、温かい塩ラーメンを食べることを考えながら、夜の帳が下りた砂漠を歩いていた。

CP6にたどり着き、ラーメンを作って食べていると、腹の底から元気が湧いてくるのを感じる。CP6からBPまでは残り28.1km、CP5～BPまでの区間はCP8の区間を除きディフィカルトになっていた。夜の砂漠の中をコースディレクターのカルロスが、どんなコースを用意しているのか楽しみになってくる。CPで休んでいると戸高さんもやって来たが、食事を摂らないでテントで仮眠すると話し荷物を降ろした。戸高さんが背負っていたバッグバッグを降ろすのを手伝っていた医師が、「このバッグはとても重い、何が入っているのか？」と聞いている。戸高さんは「食料です」と答えていたが・・。

戸高さんの後方の奥にテレサが座っていた。何やらスタッフと話をしているが、椅子から立ち上がろうとしているのに顔が苦痛に歪んでいる。大腿部と膝の辺りを押さえて擦りながら、スタッフの肩を借りて立ち上がる。筋肉痛かと思っていたが、「あの時は、筋肉が拘縮して硬くなり下半身に激痛が襲っていた」と、次の日に聞いた。レース終了後に行われた表彰式では、テレサは女性総合2位に入り、記念品を受け取ることになる。私も休憩後、椅子から立ち上がった時に、腰と下半身に筋肉痛が出たが、歩き始めてしばらくすると痛みは自然に消えて行った。

レース中に夜になると、フラッグに黄緑色の蛍光ペンライトが取り付けられ、砂漠の闇でもロストウェイし難いように考慮されている。しかし、私が考える一番の道案内は、先行してくれる選手なのである。後方の選手からも目印になるように、選手各自がバッグバッグに赤色点滅灯を着けてレースをしなければならない。その赤色点滅灯の明かりとペンライトの両方を追えば、まず道には迷わないし、遠くからも明かりが視認し易いのが赤色点滅灯。つまり、休憩中に先行して行く選手を確認しておき、後方から追って行く方法が夜の砂漠レースでは楽なのである。これも何度か出場した砂漠レースの経験から悟った手段で、とても有効な手段と考えている。

CP6を出て歩を進めていると、私の前に行く選手は、チームを組んで歩いている3人組の選手と、1人で歩く選手が2人、赤色灯の明かりで確認できる。視認できる選手が5人もいれば、まずロストウェイをすることはない。月明かりが照らし出す夜の砂漠を、星を見上げながら歩いてゆく。後方から砂を蹴る足音と共に、大きな歌声が聞こえてきた。朝9時スタートの16人に入っている選手が、陽気に鼻歌を口ずさみながら小走りして迫って来る。私は後方を振り返って手を叩いて声援を送ると、その選手は実に楽しげで愉快そうに、砂漠の夜に歌声を響かせながら走っている。私も、「彼のように鼻歌を歌って夜の砂漠を走り歩きできるような、小洒落た粋なオヤジになりたい」と、心の底から思い手を振った。彼は顔に照れ笑いを浮かべて会釈した後、親指を上立てながら、私の横をBP目指して砂漠を越えて行った。

CP7を通過してしばらくすると、睡魔が襲ってきた。時間は夜の21時過ぎだが、眠くて眠くて仕方がない。ボトルに入れた水を顔にかけて眠気を覚まし、気分転換に前の3人組のチームを一気に追い越した。気分を変えてヘッドライトの明かりを消し、月明かりの砂漠の中で一人になる。お腹も空いてきたが行動食がないので、エビオスを右手いっぱいに取り出して、口の中に放り込む。チューブから伝わる水でゴクリと胃に流し込み、空腹を押さえる。水はチューブ越しに砂漠の外気に触れているので、日中とは違い冷たい水になっていた。

小さな砂丘を連続して越えていると、遠くの地平線の辺りに街の灯りが見えた。灯りは砂丘を越える度にとっても大きく見えるのだが、決してBPではないのが分かる。BPの灯りならば点になって見えるのだが、見えている灯りは線になって地平線に広がって見えている。あの灯りの下で生活している人がいると思うと、砂漠レースをしている自分自身に対し、少し複雑な気持ちになった。日本で待つ家族の顔が脳裏に浮かび、応援してくれる友人や同僚の姿が眼に浮かんでくる。カルロスよ、本当にそんな素敵ない図を、このコースに張り巡らしていたのかい？

CP8に着くと、Dr. バルが「ウエルカム、セージ♪」と笑顔で右手を上げ出迎えてくれた。私はDr. バルとの初対面の時を思い出し、彼女の笑顔を見たとき胸が熱くなり、自然に目に涙を溜めていた。レース前々日、集合場所のホテルで私は部屋で、食中りで苦しみレースの出場回避を考えていたのである。近藤さんがDr. バルを部屋に連れて来てくれ、私の身体の状態を診察して薬の処方とアドバイスをしてくれなければ、レースに出場もできなかったであろう。Dr. バルに本当に感謝している、「ここまでサハラレースを楽しみながら砂漠を乗り越えて来れたのは、あなたの御蔭である」と、英単語と身振り手振りを駆使したボディークラウドで伝えたのだが、理解してくれたであろうか？

BPまでは残り8.1kmの距離であったが、キャメルバッグには水を1リットルほど入れ、BPを目指すことにする。私が追い越した3人組のチームがCPに着いたが、スタッフに手を上げて言葉を交わすと、水の補給も受けずに休憩しないでBPへ向かって歩いて行った。チームでエントリーしている出場者は、レース中は3人が半径25m以内において共に行動しなければならない。そのルールが守れないとペナルティーが科せられる。また、チーム・エントリーしていても3人の選手の内1人がリタイヤすると、チームでの公式記録は残らずに、個人エントリー扱いでの記録になる。なかなか走力が一緒でないと、砂漠レースでのチーム戦は厳しいものがあり、日本人選手同士でチームを組んで砂漠レースに出場した話は聞いたことがない。

CP8からBPまでのコースは、圧巻だった！「よくも最後にこんなコースを設定し、選手を楽しませてくれるもんだ」と、コース・ディレクターのカルロスが「ニヤっ」と笑う姿を想像し、砂丘を乗り越えた。足首まで埋まる砂丘の上り、「この波打つ砂丘を越えればBPが見えるのでは？」という選手心理を突いては裏切り、砂の海が永遠と続く。近くでゴールする選手を歓迎する太鼓の音が、砂漠に響き渡る。いい加減、この急斜面の砂丘を越えればと思っても、見えるのは砂丘に散らばるペンライトの灯りだけ。前を行く3人組のチームの選手と、その先を歩く1人の選手を途中で追い越した。コースが左旋回し、さらに足場の砂が深くなると、前方の空にBPの灯りが見えた。

砂丘に足を取られながらも、前へ前へ進んでゆく！ゴールしたら「コーンスープを飲むんだ」と、自分に言い聞かせ空腹に耐えながら、最後の急斜面を登って行った。ゴール前の急斜面は、人の足跡の着いている場所を選び、その上に自分の足を乗せるようにストックを巧みに使って、足をハの字に開いて前に歩を進める。斜面を登りきると、目の前にゴールゲートが広がっていた。「身体中の血が、逆流しているのではないか」と思うぐらいに興奮し、雄叫びを上げながら走り出す。天空から降り注ぐ月明かりと星の輝きを全身に受けて、私のオーバーナイトステージは終わった。サハラ砂漠の夜空に鳴り響く太鼓の音を聞きながらタバコを吸っていると、自然に涙が溢れ出しくる。嬉し涙に暮れて

いる私の背中を優しく叩き、「おめでとう」と先着していた選手が握手を求めてきた。

レース5日目：87.6km 18時間01分55秒 55位

時計に目をやると、0時を廻ったところ。自分に課した目標時間を大幅に上回ってのゴールに大満足し、しばらくはゴール横のスタッフテントの椅子から動くことができなかった。水2本を受け取り、自分のラムセス・テントに帰還すると、藤岡さんとクリスチャンは先にゴールして寝おり、香港のリチャードはレース3日目でリタイヤしてからは、レースには加わっていない。3人を起こさないように寝床を作り、コーンスープを飲み、焚き火の近くへ移動した。ゴールした興奮の波で寝付けないのか、10人ぐらいの選手が火を囲んで談笑している。私も選手の輪に加えてもらい、ゴールの余韻に浸りながら、スープを口にした。スープを2杯飲んだ後、着替えをしてから寝袋に潜り込んで、ご就寝。

朝7時半に目が覚めると、戸高さんがテントに帰ってきていた。CP5へ向かう途中に一緒になり、村を通過していたのだが、そのときに悪ガキ2人組に赤色点滅灯を盗まれたそう。後で聞いた話だが、テレサも赤色灯を盗まれ、何人かが被害を受けたようである。朝食を食べ終わり、凧揚げの準備をしていると、高橋くと岩瀬さんが帰ってくるのが見えた。26時間かけて砂漠と格闘してのゴール、とても清々しい笑顔をしている。彼らが砂漠レースの魅力に取り憑かれるのも、時間の問題であろう。高橋くんは万歩計を着けてレースをしていたが、オーバーナイトステージでは13万7000歩を刻んでいたと話していた。その後、村上さんも帰って来た。ゴールゲートを潜る前に、ユーさんにカメラで写真を撮ってもらっている。村上さんが疲れきってゴールした瞬間を、正面から写真に撮ったのは私だけだった、お疲れ様でした。

この日は一日休日となり、明日のピラミッド前でのウイニングランでレースは終わる。砂漠で過ごす時間も終わりが見えてきて、とても寂しい気持ちになっていた。砂漠での最後の時間を惜しむように、より多くの選手と話をし、砂と戯れながら遊び、砂漠の景色を目に焼き付けながらの時間を過ごす。たけちゃんのテントを訪れると、彼女のテレサも一緒にいたので、二人に話をした。「私は次の砂漠レースに、2011年のアタカマ砂漠でのレースを考えている。二人の都合が会えば、次に会うのがアタカマになるが、一緒にレースに出場しないか？また、もし君たちが結婚することになり、子供が生まれたら、20年後でも子供と一緒に連れて、同じ砂漠レースに出場しないか？」と誘ってみた。

テレサは日本語がほとんど話せないのだが、「結婚」という言葉は理解していたようだ。たけちゃんに通訳してもらおうと、嬉しそうに「結婚」という日本語を繰り返し照れ笑いをしていた。カナダ在住の若菜さんとジェームスのカップル、そして私が息子の月桜(なお)を連れて、遠い未来と一緒に砂漠レースを楽しめる日が来たら、どんなに素敵なんだろう！日本へ帰国したときは、必ず連絡してくださいね♪

10月31日(第6ステージ：ウイニングラン) 約2.0km

今回のサハラレースは、オーバーナイトステージで実質的には終了しているようで、順位も結果も昨日までのものが対照になっていた。第5ステージまでに踏んだ砂漠の距離は248.9km。ウイニングランでは順位もタイムも関係なく、ギザのピラミッドの前で、選手が思い思いにフィニッシュ・ゲートを目指す。ただ、そのスタートラインまでは、現在いる砂漠から車で4時間ほど移動しなければならない。

朝6時に選手は集合との事だったので、朝5時に起床した。砂漠の中で迎える最後の朝、ヘッドライトの明かりで移動の準備を開始する。朝食用に残しておいた2袋のアルファ米は、昨夜テントの中央部分に置いといた。この場所に食料品を置いておけば、テント内で必要な人が勝手に食べてよいと云

う暗黙の了解になっている。アルファ米2袋は見事になくなっており、誰かの胃袋に収まってくれたのであろう。私は戸高さんが昨日放出してくれたナッツ類をキープしておき、今日の朝ご飯の代わりに食べていた。このナッツ類が、昨日のCP6で、戸高さんのバッグバッグが重いとスタッフの医師が感じた訳なのだろうか？

藤岡さんは毎朝起床すると、「グットモーニング・サハラ」とテントメイトに挨拶していた。この言葉を聞くのも今日で最後。身支度を整えて、テントメイトと記念撮影をしながら話をしていると、クリスチャンがオーバーナイトステージで逆転され、イタリアのパオロが優勝したと、この時初めて知った。準備が整い6時前にテントの外で待っていると、この四輪駆動車に乗り込みなさいとスタッフから指示があり、バスが来る場所まで砂漠の中を移動開始。エジプシャン・スタッフの運転は本当に荒くて、砂漠を疾走する車の中ではパリ〜ダカール・ラリーのような気分が味わえた。朝日が昇り始めると、レース最終日を迎えたことに気分が高揚している。テント村の砂漠から車で6〜7km走った場所に道路があり、その場所に選手達は車から降りてバスを待っていた。ここからはバスに乗り換えて、ギザのピラミッド前に移動を開始する。

バス待ちの間、仲良くなった選手と話しをして写真を撮りあった。バスが来たので、割り振られているバスに乗り込んで出発進行！バスの車窓から外の景色を眺めていると、街が現れてきた。通学途中の小学生が鞆を手に持って、制服を着込んで学校へ通学している。途中の商店で何やら買い物をしている子供もいた。バスはしばらく進むと徐行して停車、なかなか動き出す気配がない。またバスが故障して動けなくなったのかと思っていると、バスの外に白い制服を着た警察官が沢山いた。私服警察官と思われる人の上着の両腰には、拳銃と自動小銃が見え隠れしている。

数十分経過してバスは動き出したが、バスの車窓からは警察署が見えた。検問のようなものが行われていたのだろうか？バスは砂漠の中を走り続け数時間、スタート前日に立ち寄ったドライブインの先に停車し、トイレ休憩。そしてバスは再び発車して、いよいよウイニングランの会場に、ピラミッドの正面玄関(スフィンクス側)に到着した。ピラミッドには安宿に宿泊していた時に、樺沢さん、佐藤くん、戸高さんの4人で見学しに来ている。

タフリールのバス乗り場で、佐藤くんと一緒になって「ピラミッド、ピラミッド」とエジプシャンに話しかけ、バスを教えてもらい、バスを探して4人で飛び乗った。帰りは同じバスが来ないので、「ギザ、メトロ」と大声で呼び込んでいる乗り合いのマイクロバスに乗り、地下鉄のギザ駅から電車に乗って帰って来た。バスの代金は2LE(約40円)、マイクロバスと地下鉄は1LEの料金。こんなチープで楽しい旅の方法をしてくれたのは、日本の女子大生の鈴木さん。彼女は女性一人旅でエジプトに来ていて、安宿で仲良くなり情報を得たが、忘れられないピラミッドの思い出となっている。

子供の頃から憧れ続け、一度は自分の眼で見たいと思いを馳せていたピラミッド。ウイニングランのコースは、スフィンクスの横を通り抜け、参道を上って正面にカフラー王のピラミッド見ながら葬祭殿を左に曲がり、メンカウラー王のピラミッドを右側から回り込んで、登り斜面の砂漠を駆け上がるとゴールゲートが待ち構えている。私がもう一度エジプトの地を訪れて、ピラミッドを見る機会が来るのだろうか？そんな事を考えながらスタートした。

今回のサハラレースで優勝したイタリアのパオロ・バニーニと、女性1位の南アフリカのエリカ・ターブランシェの二人が、自分の国の国旗を掲げながら先頭を走りウイニングランを開始。その約10分後に、残りの選手が一斉にスタートした。いつまでも、この素敵で時間が終わらなければ良いのにと思いながら、自分のペースで進んでゆく。私の好きなカフラー王のピラミッドを触り、「次に来る時は、息子の月桜(なお)を連れてレースに出るときだから」と話しかけ、万感の思いを胸に走り出す。何で

人が感動している時に、「20LE(エジプトポンド)で駱駝に乗らないか？」と駱駝引きが話しかけてくるのかなあ〜。

ピラミッドの間を走り抜け、サハラレース最後のゴールゲートが見えてきた。砂漠の丘の上に駱駝が並び、エジプシャンが音楽を演奏して選手のゴールを出迎えている。坂道にさしかかると、藤岡さんが「一緒にゴールしませんか？」と話しかけてきたが、私は「自分のペースでゴールしたいので、申し訳ない」と、彼の申し出を断りゴールを目指す。サハラレースのゴールは、レースに気持ち良く送り出してくれた家族を思い、家族と約束したゴール前での決めのポーズをしなければならない。ゴールゲートの前には赤い絨毯が敷かれており、トラボルタの「愛の風車」の振り付けを繰り返してから、右手の人差し指で空を指し、ステップを踏む。ゴールゲートの3m手前からは、私をゴールに迎え手くれる人からの手拍子も加わり、歓喜の瞬間を迎えた。

ゴールすると、メアリーが大きな完走メダルを首に架けてくれ、「これで南極レース」の出場権を得られたと、心から喜びが湧き上がってきた！ゴール後は、ピザが並べて置いてあるテーブルに直行し、腹が膨れるまでピザを食い倒し、ステラビールで喉を潤した。レースで食べているインスタント食品は「エサ」、レースをするためだけに食べ物を口にはしていると言う感覚が、私にはある。久々に「食べ物」と言う感覚が口の中に広がり、満腹感の幸せを味わった。

お腹も膨れて、タバコを一服してから、選手やスタッフの人とレースの余韻に浸って写真撮影開始。ゴビマーチの時は、感極まって嬉し泣きしたが、今回のサハラレースでは笑顔しか出てこない。そして、いよいよ最終目標であるピラミッド越えの凧揚げを始めた。樺澤さんが手伝ってくれて、数回凧を揚げてみるが、なかなか凧は風をつかんでくれない。数回、凧が落下した後に、砂漠の丘を登ってきた子供二人組みが現れた。子供に凧を持たせ、再度チャレンジ開始。凧はグングンと風をつかみ、大空に舞い上がる。凧糸を伸ばしていくと、凧はピラミッドの高さを越えているような高さまで舞い上がった。凧はピラミッドの方向へは上がらず、スフィンクス側の丘の方へ舞い上がっている。自分ではピラミッド越えの凧揚げをしたと勝手に自己満足。

ゴールの場所では、エジプシャンの警察官が白色の制服を着て沢山おり、レース関係者以外の人の立ち入りを見張り警戒している。子供たちは、警察官から「向こうへ行け、ここに近寄るな」と言われたようで、もと来た道に戻ろうとしていた。私は子供たちを追いかけて砂漠を歩き、揚げていた凧を何とか凧を子供にプレゼントすることに成功。凧は上空で何度か宙返りをした後に、スフィンクスがある谷の方へ墜落して行った。

サハラレース2009：総合距離約250km 55時間01分56秒 総合順位64位  
世界23ヶ国からの出場者120名 完走者95名

砂漠レースでは、一般のランナーから見ると「過酷なレース」のイメージがとても強い。しかしレースに出場していると、選手やスタッフは、砂漠レースの「旅」を楽しんでいるように感じる。大の大人が砂漠で「かけっこ」をし、灼熱の大地の暑さを肌で感じ、観光では味わえない景色を堪能しながら、真剣に遊んでいる。レースを通じて世界中の人と友達になり、自己の肉体と精神力が磨かれていく。確かに、1週間で250kmの砂漠を越えてゆくレースは、本当に辛い。砂漠レースでしか経験できない「出会い」と体験が、私を成長させてくれる。

私は、「砂漠レースは1週間で終わるものではない」と考えている。「レースに出場しよう」と行動を始めた時から、すでにレースは始まっており、家族とスーパーへ買い物に出掛けても、自然にレースに使う装備を選び食料品を物色している。自分に合った体力練成を始め、レース資金も少しずつ貯蓄

している。レース後も、素敵な砂漠フレンズとの交流が続き、人の「輪」が広がるのは、本当に財産になっている。もちろんレースに出場するためには、家族の協力と職場の理解が必要であることは言うまでもない。

そんな素敵な砂漠レースに魅せられて、私の挑戦はこれからも続けて行くつもりである。次回は2011年3月、南米チリのアタカマ砂漠でのレースを考えている。世界一乾燥している場所でレースが行われるアタカマクロッシング、雨は何年も何十年も降っていない地域。アンデス山脈の雪解け水の川を渡り、コンドルを追いかけながら砂漠を越えてゆく。標高も2500m~3000mで行われるようで、朝と夜の気温差が激しいことでも知られている。

レースを終えて自分の家に帰り着くと、家族が暖かく出迎えてくれた。日常の生活に戻る瞬間である。砂漠で過ごした無音の生活が嘘のように、生活の雑踏が街には溢れている。砂漠レースでしか会うことのない友人とも、しばらくのお別れである。レース中の砂漠で過ごす時間は、私の人生の経歴を加えて行く過程で、とても濃厚な時間になっている。次に砂漠フレンズ達と会するのは、天境線がアンデス山脈まで広がる灼熱の大地で・・・再び。